（第2号様式）

令和5年3月 29 日
県立綾瀬高等学校長

令和4年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 （令和2年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （3月23日実施）	総合評価（3月28日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒の学力向上に資する、新しい学びとその評価方法を確立し、組織的な授業改善を一層進める。 ②生徒が学ぶ意欲を向上させ、課題解決力を身に付けることのできる教育課程を編成するとともに新学習指導要領の完全実施のための指導体制を確立する。	①ICT を活用した教材を引き続き研究し、年間授業計画通りに授業を展開する。また、その評価方法を確立し、組織的な授業改善に努める。 ②今年度より実施の新学習指導要領及び１人１台PC 導入に向けて指導体制を確立する。	①動画やオンライン授業等、ICTを活用した授業と評価の研究を引き続き行う。 ・自宅待機者に対してもGSuite 等を活用した有効的な家庭学習の促進を行う。 ・授業のUD化を進める。 ②習熟度別に対応し、１人1 台 PC を活用した授業のための組織的改善を進める。	①教室での講義型から脱却した授業の研究ができたか。 ・生徒対象アンケートで、ICT を利用した家庭学習時間が増えたか。 ・授業のUD化の実現を図れたか。 ②生徒による授業評価の「生徒の理解」の項目のポイントが上がったか。	①動画やオンライン授業等、ICT を活用した授業については、多くの教員が積極的に取り組んでいた。 ・コロナ等自宅待機者だけでなく日々の家庭学習に対してもGSuite 等を活用していた。 ・授業や定期テスト等のプリントは、UD化やルビ対応にしっかりと取り組めた。 ②1人1台 PC を活用した授業のための組織的改善は、限られた範囲でしか進めることができなかった。	①②共に、多くの先生方が積極的に取り組もうとしているが、ハード面、特に Wi-Fi 環境が十分に整っていないので十分な成果を得ることができていない。	①②1人1台PC導入に伴って、有効活用の具体的事例を示す等、学校全体で利用頻度を高める工夫が必要ではないか。 ・家庭学習などでPCの利用が促進されているところはすばらしい。 ・対面方式でのコミュニケーションも大切である。	①動画やオンライン授業等、ICT 活用のスキルは多くの教員が身に付いた。また、家庭学習用のコンテンツを作成する教員も出てきた。 ②1人1台 PC を活用した授業改善は進んでおらず、組織的な取組が必要である。	①②作成したコンテンツを共有する仕組み作りと、外部が作成したコンテンツの利用促進を図る。 ・教員向けのミニ講習会を複数回行い、1 人 1 台PCの活用に向けて組織的な授業改善を図る。
2	生徒指導 ・支援	①変化する社会と生徒への理解を深め、いのちを大切にする相談支援体制を確立し、すべての生徒に対し最適な支援を行う。 ②部活動、生徒会行事や委員会活動等の新しい支援体制づくりを推し進め、活動の活性化を実現し、生徒の主体性の育成を図る。	①相談支援体制を確立し、情報共有からケース会議、外部の支援機関等との連携等を行い、すべての生徒に対し最適な支援を行う。 ②部活動や委員会活動等の活力を向上させるために、職員が生徒とともに活動を行い支援する。	①各学年の教育相談担当とCo間の情報共有会議を定期的に設定し、必要に応じてケース会議、その後の支援へとつなげていく。 ②生徒会諸活動をさらに活性化させるために、職員が率先して生徒と向か い合い、生徒が充足感を感じる学校をつくる。	①学年とCo間で情報共有の場を定期的に設定できたか。 ・必要に応じて速やかにケース会議が設定できたか。 ②生徒と向かい合う時間を作るための校務の効率化が進められたか。 ・職員全員が自身の能力を活用して、生徒とともに活動し、支援することができたか。	①今年度 SC は週1回の来校だが相談件数も増加し、常に満員の状況である。時間割の中に情報共有会議を設定するとともに随時検討した。必要に応じてケース会議や関係職員とともに専門機関につなげた。 ②コロナの影響で中学校以来部活動未経験者が増え、部活動加入率が 70％を切ってしまったが、着実な活動実績を残す部活動も多い。 ・特別募集生徒が置かれている背景も含めて、すべての生徒を支援する雰囲気が醸成されつつあり、インクルーシブ教育のよい影響であると考える。	①人間関係構築の困難を訴える生徒が多い。来年度は SC に加え SSW も週1回来校となるため、効果的な相談体制を整えたい。 ②体育祭や文化祭や大いに盛り上がったことからも、生徒が課外活動を渇望していることが実感できる。生徒が達成感を得られるよう工夫を考えていくことが課題である。 ・コロナ禍の中、部活動参加生徒の努力は将来につながると確信している。その姿を外部発信する手段が課題である。	①SCやSSWとの緊密な連携も重要ですが、教職員全員が生徒の状況に対して日常的にアンテナの感度を高めて、情報共有が進むような体制づくりを追求してほしい。 ・支援について関係機関との連携ができている点はすばらしい。今後も専門的な知見で生徒を支援していく必要がある。 ・すべての生徒を支援する雰囲気が醸成されることは教育現場の理想形である。 ②部活動等においてコミュニケーション能力育成を図ってもらいたい。	①生徒の困り感について組織的に対応する体制はできているが、生徒の困り感に気づくアンテナの高さを持った教員が少ない。 ②生徒のコミュニケーション能力育成のためには、学校行事や部活動の活性化は欠かせない。とりわけ体育祭や文化祭等の学校行事において、より多くの生徒が達成感を得られるような工夫が必要である。	①SCをはじめ専門家による研修を開催し、生徒の困り感について気付くスキルを高めていく。 ②学校行事を今まで通りの方法だけで開催していくのではなく、教育的意義を根本から検討して改善を図っていく。 ・本校部活動の魅力について外部に発信していく。
3	進路指導 ・支援	①進路データの蓄積と分析により、エビデンスに基づく「キャリア教育実践プログラム」を実践し、生徒の目標レベルを高め、その進路希望の実現を支援する。 ②「正解」のない課題を発見し、その解決に挑み、自らの学びと生き方をデザインしようとする態度や多様性を認めあい、人と協働して積極的に社会に貢献しよ	①エビデンスに基づく「キャリア教育実践プログラム」を実践していくことで、生徒自身で目標を定め、自身を高めることを目指せるよう適切な支援をする。 ②「正解」のない課題を発見する仕掛けを工夫していくとともに、周りの人と助け合い協働しながら積極的に社会に貢献し	①進路選択を見据えた指導及び進路データ分析によりその場に適応した的確な支援を行う。 ・補習・補講の参加生徒数を増やし、模擬試験等の受験生を増やす。 ・医療看護・保育等の支援体制向上を図る。 ・進路マニュアルを作成し、活用する。 ②上級学校卒業後の進路を見据え研究・探求の中	①入学時の進路希望が8割達成できたか。 ・補習・補講の講座数及び参加生徒数。 ・模擬試験等受験者数。 ・進路マニュアルの活用状況。 ②生徒が自ら設定した課題の探究を進めていくことができたか。 ・探究活動等の発表においてその後のアンケート等で、自己評価及び他者評価で高評価を得ることが	①入学当初は4年生大学を希望する生徒は多いが、学部学科等具体化されていない。学年が進むにつれて卒業後の進路が明確になり、最終的に希望とした進路に進む生徒が多い。 ・模擬試験等は医療系に関しては希望する生徒が多い。そのほかの分野においては少なく、改善が必要である。 ・講習等も参加生徒数は多くなったといい難いが、本年度、オンラインでの講習等も実施	①外部の力も得ながら、新たな取組を取り入れ、活用していく。そこから得られた情報について面談等を通じ、生徒一人ひとりの学力の定着状況や学習上の課題を理解し、授業等の取組の改善につなげ学習意欲を向上させ、卒業後の進路について意識の向上を図っていく。 ②今年度培った手法を続けていき、協力を継続して探究活動の活性化に	①外部の力を得ながら新たな取組をし、授業改善を図るという点は新しい視点だと思う。 ・高校生活は大人への準備期間だと考える。いろいろな情報ツールを使い、進学や就職のアドバイスに生かしてほしい。 ②生徒の学ぶ意欲を高める工夫を、個々の教員だけでなく学校全体で進めることが大事である。 ・綾瀬市に関する探究活動	①生徒の進路に対する意識向上のために、外部の力を借りて模試、進路講演会、入学者選抜期間中のワークショップ等を実施しているが、参加生徒が少ない。 ②総合的な探究の時間では、NPO の協力のもと課題解決型学習を実施し、成果をあげた。	①三者面談等の機会を使って1・2年生徒・保護者へもう一段強い周知を行い、学校外の講習、ワークショップ等の参加者を増やし、進路に対する意識を高めていく。 ②総合的な探究の時間では引き続き NPO と連携して課題解決型学習を続け、生徒の学ぶ意欲

	視点	4年間の目標 （令和2年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （3月23日実施）	総合評価（3月28日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		うとする姿勢を育成する。	ようとする姿勢を育成する。 ・インターンシップや現場実習等の学校外での将来の進路を見据えた体験を通して生徒の自己理解を深め、進路選択を支援する。	で「正解」のない課題を発見する仕掛けを工夫する。 ・資格試験取得促進 ・総合的な探究の時間やACT の時間の充実を図り、思考力・判断力・表現力の向上を務める。 ・インターンシップパスポートを活用して、自己理解を深める。	できたか。 ・インターンシップ参加状況及びインターンパスポートの活用状況。	し、新たな取組をすることができた。 ②探究活動においては外部NPO 法人の協力をえて、探究活動を行った。また、この活動を通じて得た知識を生かし、後期には綾瀬市に関してもグループでの探究活動を行った。 ・インターンシップ等に関しては、コロナ禍で十分に行うことはできなかった。	つなげていく。 ②インターンシップに関しては、外部機関も活用し、充実化させていく。	はぜひ小学校との交流をお願いしたい。		が他教科の学習にも好影響が及ぶようにしていく。
4	地域等 との協働	①地域の変化を踏まえた連携を深め、地域の教育力を活用する。また、生徒が学んだ成果を効果的に発信し、地域に還元する。 ②開かれた学校づくりを行いチーム学校の具現化を図る。	①地域に愛されることが良質な学校づくりに欠かせないことを自覚し、地域に根差した教育活動を継続する。 ②学校運営協議会を有効活用し、チーム学校の具現化を図る。	①自治会や市が主催する交通安全活動等に、生徒会本部の生徒だけではなく、有志を募って積極的に参加する。 ・社会福祉的なボランティア活動には、本校の特質を理解するためにもより一層協力していく。 ・学校説明会等の広報活動をより活性化させ、本校の知られざる魅力を伝える。 ②コロナ感染拡大の影響により対面開催ができない場合の学校運営協議会の運営方法を工夫して、学校の方針を周知し、意見をいただきながら学校諸活動の改善を図る。	①地域から愛されていることを生徒が実感できているか。 ・説明会の参加者や受検者が増加したか。 ・中学校が本校の実態について正確に理解しているか。 ②学校運営協議会委員との意見交換が活発に行われ、一緒に学校を作る組織づくりを進められたか。	①コロナ禍の中、ふれあい交通安全活動は1回のみの参加となった。 ・学校説明会に参加するよう生徒会役員等に呼びかけとこころ、積極的に本校の特色を発信している様子が見られた。 ・学校外で2回、学校内で1回の学校説明会を実施し、オープンスクールをより充実させ、学校見学等をできうる限り数多く開催した。 ・インクルーシブ教育が、学校全体に、よい影響をもたらしていることを PR し続けた。 ②対面での学校運営協議会を実施し、活発な意見交換を通して、より良い学校の在り方を検討することができた。	①ふれあい交通安全活動については、あいさつ運動に変える等、実施形態の変更も含め検討していく必要がある。 ・職員・生徒ともに、自分の気持ちや周囲の状況を説明会参加者に伝えるための工夫を更に考えていく必要がある。 ・効果的な説明会の実施に向けて、時期、内容について検討していく必要がある。 ・中学生や保護者へのホスピタリティーの再確認が必要である。 ②議論した内容について、実施可能なものは早急に取り組んでいく。	①今年度はコロナでの制約が学校側にもあったと思われる。次年度は地域との連携について、もう少し歩み寄れるとよい。 ・コロナ禍のため、交通安全指導も1回のみしかできず残念である。	①コロナの影響も少なくなってきたので、以前のように地域の行事や防災訓練に生徒を参加させていく方向であるが、開催間隔が空いてしまっているので、地域との調整が必要である。 ・コロナの影響が少なくなることにより、学校説明会も生徒の活動の幅をもっと広げていく必要がある。 ②学校運営協議会は対面で実施できたが、地域部会の活動ができなかった。	①②地域の行事へ生徒を参加させるために、地域部会を活性化させ、参加した生徒がより学びの多い取組になるようにしていく。 ・各回の学校説明会の目的の違いをはっきりとさせ、それぞれの回の目的を達成できるよう、企画を練っていく。
5	学校管理 学校運営	①相互理解を深める教育活動、インクルーシブ教育推進に向けた環境づくりを図り、共生社会の実現を図る。 ②「いのち」を大切にし、事故、災害や疾病に対し自ら対応する力を育む。 ③教職員のキャリアステージに応じた資質・能力を高めるとともに、職員の働き方改革を一層促進し、効率的・組織的に学校運営を進め、生徒と向き合う時間を確保し、安心し信頼される学校の管理体制を構築し、維持する。	①インクルーシブ教育推進に向けた環境づくりを図り、共生社会の実現を図る。 ・真の意味でのユニバーサルデザインを積極的に取り入れ、効率的な学習を促す。 ②「いのち」を大切にし、事故、災害や疾病に対し自ら対応する力を育む。 ③効率的・組織的に学校運営を進めるために、会議の在り方や ICT 利活用について工夫・改善する。	①キャリア支援センターを設立し、生徒が相談しやすい環境づくりを進める。 ・学習環境のUD化を進める。 ②地域、PTA とも連携した防災訓練を実施する。また、コロナ感染を踏まえたことを意識し、防災訓練に望ませ、有事の際にはそのことを活かした主体的な行動がとれるようにする。 ③Teams を活用した情報共有と会議の定例化を図り、全教職員の意思疎通により、組織的に学校運営を進める。	①キャリア支援センターにおける生徒相談の件数。 ・学習環境のUD化の実現状況。 ②アンケートを実施し生徒が主体的に行動出来たか。 ・地域防災について、コロナ感染防止に努めながら、地域住民のことを意識し行動することができたか。 ・感謝の気持ちを持って防災訓練に参加することができたか。 ③Teams 活用による情報共有が定着したか。 ・定例的に会議が実施され、全教職員の意思疎通を図りながらの学校運営が実現したか。	①キャリア支援センターにおける生徒相談の件数は、ほぼ毎日２～３名支援員に進路相談しに来ていた。 ・授業や定期テスト等のプリントは、UD化やルビ対応にしっかりと取り組めた。 ②校内の避難経路を確認した。また、地区別に防災マップの作成・確認を行い、有事の際の対応について地区別リーダー・サブリーダーを中心に確認することができた。 ③Teamsを活用した朝の打合せや職員会議は定着した。また、グループや学年の情報共有もTeams活用が定着し、会議の効率化が図れている。	①卒業後の支援について組織的に対応できる体制を作っていく必要がある。 ②アンケートは実施できなかったが、地区別に協力して防災意識を高めることができた。また、地域との合同防災訓練は見送られた。次年度は実施できるように準備を進めていきたい。 ③来年度はTeams内の打合せ掲示板に保護者からの欠席連絡を集約する機能が実装される予定なので、活用していきたい。	①卒業生の支援という分野は高校にとっては未知の分野なので、方策や組織づくり等丁寧な対応をお願いしたい。 ②コロナ禍によりPTAとして、先生方との交流や学校運営のお手伝いが行えず残念であった。	①キャリア支援センターの環境はほぼ整えることができた。 ・プリント類のUD化はほぼ達成できた。教室環境のUD化については、フロントゼロについてはほぼ達成できた。 ②予告した中で一斉に行う防災・避難訓練は実施できているが、突然襲ってくる災害に自分の力で対応する力を養うような訓練は不十分と考える。 ③Teams を活用した情報共有は達成しているが、会議の精選に課題がある。	①キャリア支援センターの卒業後の支援体制を整えていく。 ・教室環境のUD化を推進する。 ②防災訓練のあり方を検討し、災害時に生徒が自ら命を守る力を育成できるようにする。 ③引き続きTeamsの活用による業務の効率化を図るとともに、会議の精選を図り、生徒と向き合う時間を確保する。